

2 自然の営みと日本人の心性



前林 清和
MAEBAYASHI Kiyokazu

神戸学院大学現代社会学部社会防災学科／教授／博士（文学）

日本では気候や地形、地質の影響により恵みも多いが、洪水や地震、土砂崩れ等の災害が多く起こる。災害などの自然の営みは、日本人のものの考え方にどのような影響を与えているかを教えていただいた。

災害大国日本

日本は、気候も地形も変化に富んだ美しい国で、四季を通じて多くの恵みを私たちに与えてくれる。しかし、同時に、世界でも有数の災害大国と言われている。地震、それに伴う津波、台風、高潮、豪雨、

土砂崩れ、洪水、火山噴火、豪雪など様々な災害が、太古の昔から私たちの生活を脅かしてきたのである。

神道的自然観

日本列島は、地理学的、気象学的、そして地質学



写真1 東日本大震災

的に見ても天変地異が頻繁に起こる。しかもそれが激しい場所である。

災害が多発する環境のなかで、古代から日本人は、人間の力を超えたものに対し、おそれかしこむ心情を起こさせるものをカミと呼んだ。山、川、海などに畏怖を感じ、そこに根源的で神聖・清浄なものを見た。また、生い茂った樹木や巨大な岩なども神聖視した。そして、嵐、水害、飢饉、疫病などの災害災厄、徳川家康などの偉大な為政者や平将門のような逆賊、祟りを起こした菅原道真も神として崇め奉っている。土地神、氏神はもちろんのこと、一般の人間も死後、葬儀を経て家の神となり、子孫達を永遠に守っていくと考えられている。神道では神々は無数に存在しており、それを「八百万の神」と称した。私たち日本人にとって、神とは超越的な存在であるとともに常に一人ひとりの隣にいる存在なのである。このように日本人は、自然と神、人間が隔絶した関係ではなく不可分のものとして捉えられてきたのである。

これは、キリスト教的自然観とは全く違う。キリスト教は、一神教であり、神は全ての創造主で唯一絶対の存在である。旧約聖書の「創世」には、神は天地や動植物などの自然を創世し、最後に自然を支配して統治する存在として人間を造ったとある。つまり、キリスト教的自然観は、絶対的な存在としての神、その下に自然を支配する人間、そして最も下位に自然という構造である。実際に、ヨーロッパの自然は安定していて地震もほとんどなく、台風もないため人間が創り上げてきたものが長く存続しやすい環境なのである。

災害観

災害はいつ起きるか、どこで起きるかは誰にも分からないし、分かったとしてもそれを止めることは不可能なのである。しかし、私たちは自分や自分の近い人の身に降りかかった不幸をそう簡単には認めることはできない。理不尽な出来事を納得するために何らかの理由が必要である。その理由として、天運論と天譴論の2つが挙げられる。



写真2 東日本大震災釜石市立鶴住居小学校

天運論は、災害は人間の力ではどうしようもない「天運」であり「運命」という考えである。古代から様々な災害は雷神や風神のような「荒ぶる神」によるものと考えられてきた。私たちは人間の能力をはるかに超えた災害の原因を神によるものと捉え、納得してきたのである。そこには、神道的なアニミズムの世界が広がっている。

天譴論とは、「天が人間を罰するために災害を起こすという思想」であり、もともと、古代では天皇に対する天からの警告であった。関東大震災直後も財界のリーダーである渋沢栄一らによって天譴論が唱えられたが、その内容は為政者による悪政というのではなく腐敗した社会や国民に対する天罰という意味で使われた。東日本大震災の直後に石原慎太郎も渋沢と同じような天譴論を唱えた。このように天譴論は古代から現代に至るまで、内容の違いはあるが、大きな災害がある度に言われてきたのである。

そして、日本人は、昔から災害を神のなせる業と諦めつつ、自然と調和して折り合いをつけて生きてきたのである。

無常に生きる

日本人の「諦め」や「はかなさ」の奥には、無常観があるとされる。

「無常」とは、仏教用語であり、この世界の全てのものは生滅変化してとどまることがない、という意

味である。したがって、物や出来事に固執しても仕方がないのである。今、幸せでも明日はどうか分からない。今、繁栄していても地震で一瞬にして全てが無くなってしまふかもしれない。だから、今を一生懸命生きることしかできないのだ。「今」の連続が人生であり、その流れは刻々と変化していくのである。仏教の祖である釈迦は、「諸行無常」、つまりこの世に存在するものは全て移り変わっていき永久不変なものはないと説く。鴨長明が著した『方丈記』の前半は平安時代末期に起きた地震や竜巻、飢饉など災害のルポタージュであるが、その冒頭で「行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。」と、人生の無常が記されている。

称賛される災害時の振る舞い

阪神・淡路大震災や東日本大震災直後の被災者の行動は世界中から称賛され、感動の言葉が寄せられた。なぜなら、海外では、多くの場合、大規模災害後には暴動や略奪が頻発し、社会が無秩序化するのが当たり前だからだ。一方、日本では暴動も

略奪も起こらない、それどころか被災者たちは水や食料の配給を、列を作り並んで待っている。順番を抜かそうとする人は誰もいない。日本人は、パニックになるどころか、平常時以上に冷静に行動して助け合ったのである。

2011年3月15日付のAFP通信では、「悲劇の中、日本に集まる世界の称賛」と題して「消息を絶った家族を探しながら、生活必需品が届くのを待ちながら、冷静さを失っていない日本人の姿だ。そこには略奪や暴動の素振りもない。」と述べている。また、CNNも3月12日付で、「震災下でも文化に根ざす規律」と題し、「略奪行為も、食料を奪い合う住民の姿もみられない。震災下の日本で守られる規律は、地域社会への責任を何より重んじる文化のたまものか。」と称賛している。

社会倫理観

それでは何故、日本人は秩序だった行動ができるのか。その理由は、日本人の社会倫理観にある。先に述べたように日本人は、無常観に基づいた人生観

があり、甘んじて死を受け入れる、仕方がなかったこととして諦める。そのため、災害時の愛する人の死に対する悲しみや理不尽さを社会や他人に対してぶつけようという意識は少ないのだ。むしろ災害を起こした荒ぶる神を鎮める側、エネルギーを制御する立場に立つのである。したがって、冷静で落ち着いた態度でいられるのだ。それが、秩序ある行動につながる。

さらに言えば、大石久和氏が『国土が日本人の謎を解く』で述べているように、ヨーロッパや中国では理不尽な死の多くが戦争であったが、日本の場合は災害である。戦争の場合は恨み復讐をする相手がいるが、災害は恨む相手がいない。諦めるしかないのである。わが国は島国であり、他民族との戦争はほとんどなく、国内での戦は基本的に大量虐殺や皆殺しというようなことはなかった。しかも、江戸時代になると二百数十年間、ほとんど戦のない時代が続いた。したがって、わが国における理不尽な死は、戦争による死より圧倒的に災害や二次災害的に起こる飢饉による餓死や病死が多かった。

また、個人の欲より社会規範を重んじる社会観が昔から形成されてきたという経緯がある。それは、日本人が農耕民族だからである。農耕社会では、1人や1家族では十分な生活を営んでいくのは難しい。農作業は村全体で行い、日常生活も家単位ではなく村単位で営まれてきた。そのような社会では、個人の意思や利益よりも村全体の意志や利益が優先されてきた。日本人は、西洋的自我、つまり他者から独立した「私」ではなく、他者とつながった「私」で生きてきたのである。そのため、災害などの非常時においても、皆が個人の欲望を抑えて全体の秩序を守ることが美德とされてきたのだ。

さらに、わが国には、日本人の精神性を代表する武士道がある。明治時代になり、武士階級は消滅したが、その武士道思想は武士の世が終わってからも日本人の心のなかに営々と流れている。武士道では、



写真4 平成29年7月九州北部豪雨

忠義、勇敢、犠牲、信義、礼節、名誉、質素、情愛などを説くが、その一つに廉恥がある。廉恥とは、心が清らかで恥を知る心を意味する。わが国では、伝統的に恥を知ることが重要とされてきた。作田啓一氏によれば、恥には、「見られて恥ずかしい」という意味での「公恥」と「自分自身の内面に問いかけて恥ずかしい」という意味での「私恥」があるという。「公恥」が社会秩序を保つための恥であり、「私恥」は自分自身の内面を高めるための恥と捉えることができるが、その両方を兼ね備えることが、理想的な日本人の生き方なのである。したがって、秩序を乱す行為や迷惑をかけることは「恥ずかしい」として、やってはいけないことなのである。

このような日本人の自然観、災害観、人生観、社会倫理観は、災害を生きるなかで培われてきたのである。伝統的に日本人は、自然に畏敬の念を抱きながら、自然と折り合いを付けながら災害に対応し、被害を受ければ冷静に対処しつつ、したたかに生きてきたのである。

- <参考資料>
- 1) 作田啓一『恥の文化再考』筑摩書房 1967年
 - 2) 大石久和『国土が日本人の謎を解く』産経新聞出版 2015年
 - 3) 廣井脩『日本人の災害観』『地震ジャーナル27』1999年
 - 4) 前林清和『社会防災の基礎を学ぶ―自助・共助・公助―』昭和堂 2016年



写真3 能登半島地震輪島市内